

# 音楽理論研究会通信 第1号

WebSite: <http://sound.jp/mts/j/>

2004年4月1日発行 1. April. 2004

## 目次 contents

|   |   |
|---|---|
| ごあいさつ 音楽理論研究会代表 島岡 讓<br>会のあゆみ<br>第1回 「音楽理論の現状と課題」講演とシンポジウム<br>第2回 研究発表<br>第3回 「音楽教育の現状と課題」講演とシンポジウム | 支部活動<br>第1回 2002年11月15日 大分県立芸術文化短期大学<br>第2回 2003年11月14日 大分県立芸術文化短期大学<br>事務局より |
|---|---|

### ■◇ごあいさつ 音楽理論研究会代表 島岡 讓

「音楽理論研究会」の発足と「通信」第1号の発刊に当たり、一言ごあいさつ申し上げます。私自身、50年以上にわたる音楽との取り組みを通して、音楽が言語と同様のコミュニケーションであること、又、音楽をコミュニケーションとして捉える時に音楽の本質と諸現象が最もよく理解できることに気づかされました。音楽コミュニケーションの「発信人」は作曲家、「受け手」は聴衆ないし演奏家です。作曲者は「楽曲」という媒体を通して「メッセージ」を発信します。送られたメッセージを正しく受け取るためには、作曲者との間に共通の「コード」（構文と意味に関するルール）が前提されなければなりません。コードそのものは暗黙の中に脳内で作動し、日常は意識に上りません（言葉と同様）。この暗黙のコードを成文化して明るみに出したものが「音楽理論」です（文法と同様）。言葉の習得に「読み書き」の練習が必要なように、音楽の修得においても「音楽語の読み書き練習」は欠かせません。音楽語の「書き方」に当たるものが「エクリチュール」（和声、対位法、フーガ、作曲）、「読み方」に当たるものは「アナリーゼ」（楽曲の分析、解釈、演奏）です。「音楽理論」と「エクリチュール」と「アナリーゼ」。これら3種の学習システムを通して知的、技術的、感覚的に音楽語を身につけることにより、「音楽のしくみ」が見えるようになり、「作曲家のメッセージ」が読み取れるようになります。こうして初めて、楽曲に即した解釈と演奏が可能になり、又、音楽に密着した実証的研究が期待されることとなります。このような期待が、私たちを「研究会」の発足に踏み切らせました。以上の趣旨に賛同される方々の参加を大いに歓迎いたします。理論専攻以外の方でも、理論や楽曲分析に関心のある方は、ぜひご参加ください。



次回音楽理論研究会第4回例会は5月23日（日）となりました。  
 詳細は同封の別紙をご覧ください。

### ■◇会のあゆみ

第1回 2002年10月4日 カンマーザールin立川 講演とシンポジウム  
 統一テーマ「音楽理論の現状と課題」

基調講演 島岡 讓「音楽理論とは何か？～私の場合」

[講演の概要]

記念すべき第1回音楽理論研究会は同研究会代表の島岡讓氏による基調講演で幕を開けた。講演は「島岡理論」ともいうべき独自の音楽理論の説明が行われ、話の中心は島岡理論の中核をなす「ゆれ」である。しかしレポーターにとって興味深かったのは、氏の音楽に対する構造主義的なアプローチであった。それは配布された資料中の「コミュニケーションとしての音楽」と題された図に端的に示されている。ともすれば無前提に語られがち（あるいは前提を共有していることを当然として語りがち）な音楽理論を、このように

慎重な定義の積み重ねの上に説明していくことは、いまの日本においてきわめて重要なことであると感じた。講演のタイトルに「私の場合」とあるように、氏はあくまで個人的提案であるという態度を保持している。にもかかわらずその内容が普遍性をもっているのは思考の方法・前提を明示しつつ語られたことによるのではないだろうか。

レポーター 小川伊作

#### [シンポジウム] 「音楽理論の現状と課題」

コーディネーター：島岡 譲 パネラー：小河原美子 小川伊作 柳田憲一

#### [シンポジウム概要]

基調講演を受けて、休憩後シンポジウムが開催された。テーマに沿ってパネラーからそれぞれ20分程度発言が行われ、その後パネラー同士、会場参加者との質疑応答が行われた。小河原氏は島岡システムの優秀性を指摘、同システムの積極的な普及活動の必要性を主張した。小川は西洋音楽が日本に移入されて以来、その構造原理の共有が十分には達成されていないことを指摘。エクリチュールを中心にした音楽理論の研究と啓発活動が、日本のオリジナルな音楽活動にとって急務であると結論づけた。柳田氏は、氏の勤務校での体験に基づき、理論教育の改善にはまず実技の教員の考え方から変えていく必要があるとの意見が出された。コーディネーターとパネラー間の討議では、理論研究会の対象はエクリチュールにとどまるべきか、その周辺をも含むべきかといった意見の交換が行われた。また参加者との質疑では、実技畑の人々の音楽経験を生かすような方向性が肝要ではないかという意見が出された。

レポーター 小川伊作

## 第2回 2003年5月24日 カンマーザールin立川 研究発表

見上 潤：旋法理論 再構成の試み～教会旋法から近代旋法まで～

演奏・教育・作曲の実践に有用で、かつルネッサンスから現代までの音楽作品の分析に対応しうるような、12平均律における教会旋法から近代旋法までの旋法理論を再構成し、これらの諸音素材を系統的に分類し、相互関連を明らかにすることが、本研究の目的である。

全音階的な音素材（5線譜によって表記するに相応しい音体系）を逸脱する音素材まで対象にするため、また誤解を避けるために、5線譜を使用せず、半音列による「音素材分析表」により、柴田南雄の12音列のヘクサコードによる分析の方法論を応用して、12の音のすべての順列組合せを枚挙・分類・淘汰し、120個の最小限の音素材（オトゲノム）を抽出した。

作品分析に有効かつ多用される諸音素材（音程、3和音、トリコード、4和音、テトラコード、5和音、5音音階、全音階的音階、その他の音階、MTL、移限音素材）を同一の基準から「音素材分析表」によって枚挙・分類した。

さらに、以上のデータを基にして、全音階的7音音階、5種のテトラコードの順列組み合わせによって作られる25種の7音音階、16種の移限音素材T B T（Die Tonmaterialien mit begrenzter Transpositionsmöglichkeit 限定された移置可能性（移可性）をもった音素材）などの、新たな分類・分析を試みた。

詳しくは、以下のサイトを参考にされたい。

音楽分析学研究会 <http://www.geocities.jp/dolcecanto2003jp/>

（文責 見上 潤）

小川伊作：バッハのフーガの旋法的分析の試みと若干の問題提起-平均律第1巻第1番BWV846のフーガ分析

バッハのフーガに潜む旋法性を明らかにすべく、模倣の概念、模倣の調判定について再検討を行い、BWV846のフーガのミクロ的分析を試みた。分析結果を視覚化するために力性グラフを用いたが、その場合も五度圏に基づく定量的な表記を取り入れ、調の力性と、旋法の力性を並記することで、二つの視点からの音楽の力性構造の異同が確認された。

（文責 小川伊作）

三上かーりん：『詩から生まれた音楽』 Schumannの〈Liederkreis op.39〉  
「トポスとしてのサブドミナント」

Georg Capellen の「和声の配列」と Bela Bartok の「機能と和声の中心軸」からトニカ・サブドミナント・ドミナントがそれぞれ現在・過去・未来と密接な関係があるという仮説をもとに、Schumann <Liederkreis> op.39 の詩と音楽の結びつきを考察した。この連作歌曲には詩の内容から具体的な筋書きは見い出せない。そこで、この作品の調関係を調べる事によって、Schumann が何を意図して一つの曲集にまとめ上げたかが明らかになった。すなわち、第1曲 In der Fremde が fis で始まり、終曲 Frühlingsnacht が同主調の Fis で終わることによって、この曲集が <Liederkreis> の ”Kreis” (環) を成している。だが、最も多く使われている調 E(e) を中心のトニカ (現在) にすると、fis はサブドミナント A (過去) の地域に入る。このように音楽の機能から詩の解釈が深められ、音楽理論が一つの手助けになるということもある。

(入力・編集 見上潤)

### 遠藤信一：ラヴェル「水の戯れ」の分析

和声をもとにした楽曲分析を行った。調性と旋法の相関性 (旋律の特徴、再現部における保続低音)、旋律・和声・低音のそれぞれの響きの構成と全体の響き、導7の和音やVの第5音下方変位和音などを用いて各旋法・5音音階・全音音階を調性の響きへと組み込む技法、低音進行に見られる機能と和声、定位音と倚音による硬質な響きの和声構造について明らかにし、さらにソナタ形式の調性プランと2つの第2テーマの順序の意味などについて明らかにした。

(文責 遠藤信一)

## 第3回 2003年10月4日 GGサロン 講演とシンポジウム 統一テーマ「音楽教育の現状と課題」

### 基調講演：大宅 寛 「創作指導の体系試案としての大宅方式」

[講演の概要]

よい音楽は美しくあると同時に単純明快である。4歳で立派な作曲をしたモーツァルトの天才性は、生まれながらの資質によることはもちろんではあるが、また父親その他のよき指導者にも多くを負っているのではあるまいか。このような観点から、モーツァルトの子ども時代の作品や、バッハが子どもたちの為に残したクラヴィアのための小品などを分析することにした。その結果、それらの作品に共通した単純な和音進行、調構造、そして楽曲構成原理があることを知った。そこからインヴェンションやフーガ、そしてソナタのような一見複雑難解に見える大曲でも、基本原理に関する限り、あのかわいらしい小品と少しも変わらないという重要な結論を得たのである。

ここで紹介する「創作指導の体系試案」ならびにバロック様式の小曲、十数曲からなる「小プレリュードと小フーガ」そして3声、4声フーガへ発展していく過程を提示することによって、インヴェンション、平均律クラヴィア曲集、そして古典音楽の大曲にも通じる楽曲構成原理が萌芽的な形で含まれて、音楽大学における音楽理論の授業としても十分活用できる。

音楽とは漠とした感情ではなく言語と同様のコミュニケーションであるので、初歩段階において有効な音楽教育を行うためには、教育内容を一つの音楽様式に限定しなければならない。さらにその場合選択されるべき音楽様式としては、可能な限り構造原理が単純明快で理解しやすいものがよい。

こうした原理をしっかりとふまえた上で、ステップ・バイ・ステップに前進を続けられれば、小インヴェンションや小プレリュードとフーガ、またはソナチネ程度の作曲には、さして困難なく到達しうるものである。

(入力・編集：見上潤)

### [シンポジウム]「音楽教育の現状と課題」

コーディネーター：島岡 譲 パネラー：大宅 寛 楠瀬敏則 鈴木一真 遠藤信一

午前の基調講演を受けて、午後からシンポジウムが開催された。最初にコーディネーターの島岡氏から、今回のテーマが選ばれた経緯について、昨年の例会で、普通中学での理論教育の実践例の話があり、やはり抽象論ではなく実践的な成功例を紹介し、それをふまえていろいろな視点を加えて話をしたかった、と説明があった。ついで各パネラーからそれぞれの立場から問題があった。大宅氏。講演では限られた時間の中で、急ぎ足で説明をせざるを得なかった。ぜひ資料も見てほしい。子供たちはもともと大変な勉強家である。教育を求め、いつも子供たちは失恋をする。教師はいつも「ていねいに、具体的に教えなければならない」。楠瀬氏は小学校勤務41年、その後国立大学教育学部勤務等を経て、現在私立の音楽大学勤務という

経験をふまえ、日本の音楽教育の問題点を具体的に指摘。導入期、五線と音楽、音感、ソルミゼーションといった各分野に問題があると指摘。鈴木氏は現在公立高校音楽科に勤務している経験をふまえ、音楽大学と音楽高校の違いから、クラス授業であっても生徒との緊密なコミュニケーションが必要であること。生徒一人一人のレベルの把握と、身体的感度の良さをいかした教育方法をとる必要があると説明。遠藤氏は公立短大音楽科に勤務している経験をふまえ、実践に結びつく理論科目を目指して行ったカリキュラム改革を具体的に説明。問題点のひとつとして音楽の指導者がエクリチュールを十分に理解していることの重要性を指摘した。

レポーター 小川伊作

## ■◇支部活動

### 音楽理論研究会第1回大分例会について

10月に音楽理論研究会が発足したことを受け、早速大分で支部活動を行うこととなった。第1回は島岡譲氏による特別講義を行った。参加者は本学の学生、教員に加え、県外から卒業生、音楽教師など70名程の参加を得ることができた。講義内容は午前が「和声の文法」と題したプリントを使用した音楽分析の基礎で、午後が実作品の分析（ドビュッシー：「アラバスク1番」および前奏曲集第1巻「沈める寺」）であった。午前の基礎編では、機能和声の原理を、独自の「ゆれ」理論にそって、わかりやすく解説。豊富な実例を演奏によって提示しながら、話を進めていった。午後の分析では午前の講義で示した理論が実作品の分析に適用される、いわば「真剣勝負」の場となった。従来伝統的な音楽理論から離脱したと考えられがちであったドビュッシーの作品を、機能和声、「ゆれ」の視点から謎解きをしていく様子は、聴講者にとってはきわめて知的・音楽的興奮に満ちたものであった。会終了後このような研究会をまた開催してほしいとの要望が参加者から多く出された。

レポーター 小川伊作

### 音楽理論研究会第2回大分例会について

第2回も島岡譲氏による特別講義を行った。参加者は約50名。リピータも含め大分県外からの参加者も多かった。講義内容は「楽曲分析の基礎」と「楽曲分析 平均律クラヴィーア曲集Ⅰ巻 第1番BWV846・第2番BWV847・第13番BWV858・第16番BWV861」である。「楽曲分析の基礎」では、分析する上での着眼点である「低音の動き」の見方と島岡譲氏独自の理論である「ゆれ」と「翳（かげ）り」について説明があった。また、それぞれの説明には実作品が例としてあげられていたため、受講者にとってもわかりやすい説明であった。続く「楽曲分析 平均律クラヴィーア曲集Ⅰ巻」では、前半の講義内容を活かし、島岡氏作成の分割分析譜や力性グラフを使いながら楽曲構造をわかりやすく分析した。

10時から17時半までの長時間の講義であったが、受講生は熱心に聴講していた。また、来年度も島岡氏の講義で開催を希望する意見が多数あった。

レポーター 遠藤信一

## ■◇事務局より

一昨年の研究会発足よりあっという間に時が経ってしまいました。この辺で会の歩みを振り返り、未来につながるようなものを、ということで簡単ではありますが「通信」を発行することになりました。第1回ということでもあり代表の島岡先生に一筆お願いいたしました。また各研究会の概要を発表者および幹事の方々にお願いいたしました。ご協力ありがとうございます。今後この「音楽理論研究会通信」は、研究会の予告と報告を柱に半年に1回の割合で継続していきたいと思っております。

今回は学会へ移行の準備のための内容も含まれます。それについては別紙をご覧ください。5月の例会で、具体的なお話をしたいと思っています。

音楽理論研究会事務局 ホームページ：<http://sound.jp/mts/j/>

〒870-0833 大分市上野丘東1-11 大分県立芸術文化短期大学音楽科 小川研究室気付

TEL & FAX 097-545-4429 Email:ogawa@oita-pjc.ac.jp